

# 「は／が」と助詞選択の零度

中川正弘

## 0. はじめに

「は」と「が」の使い分けは日本語の文法の中で格別問題視されているが、それはこの使い分けができて日本人に国語として日本語を教え、説明する場においてよりも、この使い分けがまだできない外国人に外国語として日本語を教える場においてであろう。

通時的な考察まで含んだり、さまざまな用例の論理的な比較分類と分析を行う詳細で緻密な研究が行われる一方、日本語教育の実用レベルにおいて、これまで「は／が」の使い分けの説明として一般的に用いられている概念は**普通の指示／強調的な指示、既知の物事／未知の物事、古い情報／新しい情報、主題／主語**などである。専門研究レベルで精緻な定義をしつつ用いられ、普通の日本人にもなかなか理解しがたい特殊な用語とは違い、これらの説明概念は、どれを取っても、二つの助詞の使い分けができていない我々日本人には、分かりやすく、完全とは言えないまでも十分な説明だと感じられる。日本語教師にとって教室での説明に使える用語として、これら以上に実用的なものはない。ところが、相変わらずこの使い分けが日本語教師にとっても、日本語学習者にとっても問題とされるというのはどうしたことだろう。

これらの概念ではやはり不十分で、専門研究の成果を汲んだ詳細な解説が初級の日本語を学ぶ者たちにも必要ということなのだろうか。しかし、大多数の学習者が求めているのはそのように深淵な日本語の理解ではなく、高度な知的理解力を持つてはいなくとも不自然なく二つの助詞を使い分けしている日本人の子供の能力、その程度の理解のはずだ。すると、この問題はこのような概念自体の不完全さが原因というより、このような概念を説明において用いる、その扱い方と、まだこれらの助詞の使い分けができていない学習者に感じられている疑問との間に何か微妙な行き違いがあるためではないかと思える。そこで、「は」と「が」の文法機能を考察する前に、日本語学習者の感じる疑問がどのようなものであるかまず考えてみよう。

## 1. 学習者の疑問

「は」と「が」の使い分けができない日本語学習者は、例えば、次のような日本語を読んだ時、どのように反応するだろうか。(正)は正しい日本語、(誤)誤った日本語、(正)

が二つなのは使い分けられた日本語である。

- ・山田さんは飲んだコーヒーはモカです。(誤)
- ・山田さんが飲んだコーヒーはモカです。(正)
  
- ・だれは紅茶を飲みましたか。(誤)
- ・だれが紅茶を飲みましたか。(正)
  
- ・私は田中です。(正)
- ・私が田中です。(正)
  
- ・教室に学生はいません。(正)
- ・教室に学生がいません。(正)

彼らは「は」と「が」のどちらが使われていようと、「山田さん／だれ／私／学生」がこれらの文の「主語」であると理解し、間違いがあるとも、意味あいの違いがあるとも思わないであろう。これは、日本人が、日本語で訳し分けられなくはないが、同じ訳し方をすることが多く、その使い分けを見過ごしやすい英語の定冠詞／不定冠詞、単数／複数を選択と同様、そこに表されている意味の差異はそのような文法概念、文法範疇を持たない言語を母語としている者にはどうしても無視されがちだからである。

- ・ I saw a monkey. (私はサルを見た)
- ・ I saw monkeys. (私はサルを見た)
- ・ I saw the monkey. (私はサルを見た)
- ・ I saw the monkeys. (私はサルを見た)

ところが、「は」と「が」のどちらが用いられていようと主語と理解する者でも自分で日本語を話したり、書いたりしようとするとき必ず迷うことになるはずだ。主語と理解できるものに付けられる助詞として、日本語には「は」と「が」の二つがあるということは学習のごく初期から経験しているからである。そして、そう考えること自体は誤りと言えない。これらの助詞の微妙な意味の違いを理解している日本人でも日本語を英語に翻訳する時、「は」と「が」のどちらが付いていようと、ただの「主語」として扱うのが普通だからだ。

さて、ここで確認しておかねばならないのは、彼ら学習者はまず「主語」を置こうとしているのであり、これが前提だということ、そして、その場合用いることができる「は」

と「が」からどんな選択基準によって選べばいいのか、これが一般的な疑問の形態であるということである。

## 2. 疑問と説明形式のずれ

このような学習者の疑問に対して、これまで説明に使われてきている概念が**普通の指示／強調的な指示、既知の物事／未知の物事、古い情報／新しい情報、主題／主語**などだ。それぞれこれらの助詞の特徴をよく表していると感じられはするが、果たしてこのままで求められている選択基準となりうるだろうか。

念を押すようだが、これらがまだ説明概念としては不完全だから、「は」と「が」の対立をもっと的確、簡明に表現する新たな対立概念 $\alpha/\beta$ を何か見つけ出すことが必要だということではない。そのような概念がどこかにあるのかもしれないとしても、それを求める前に、確認しておいたほうがよいことがあると思える。

まず、**普通の指示／強調的な指示**だが、「主語」を置こうとしている時に、「は／が」は**普通／強調**の違いがあるというだけでは、どんな場合にどちらを選ぶべきなのか、何も選択の規準は与えていない。どんな場合に**強調**である「が」を選び、どんな場合に**普通**である「は」を選ぶのか規定しなければ、これは二つの助詞の対立を言い換えただけで、解答を先送りにすることにしかならない。強調は話者（書き手）が自由に選べるのか、それとも規則として強制されるのか、これが説明されねばならない。

次に、**既知の物事／未知の物事、古い情報／新しい情報**だが、これらの概念だと、先の**普通／強調**と違い、客観的な指標に合わせて選べそうに感じられる。そこで、説明を客観的で明確なものにしようとする持ち出しやすい。しかし、このような**既知／未知、古い／新しい**という価値が明らかに注目される場合が確かにあるにせよ、いったいどんな場合にこのような価値に関心が向けられるのか、まずその前提となる関心の選択を明らかにしなければ、**既知／未知、古い／新しい**の選択そのものに到れないだろう。下の例で見ると、英語の定冠詞／不定冠詞の用法にいくらか類似しているとはいえ、**限定／非限定**という本質的な概念と比べて、残念ながら用例全体を覆うような一般性を持っていない。

男がいた。男はボウシをかぶっていた。男は・・・

a man      he(the man)                      he(the man)

また、**主題／主語**という概念だが、これをもち出すと、学習者は必ず困惑するはずだ。そもそも**主語**を置こうとしているのであり、それが前提だ。なのに「は」は**主語**ではなく**主題**だと言われる。それなら、**主語**を置こうとしているのだから「が」を選べばいいと、これで選択における迷いが払拭されるかということそんなわけではない。**主題**であるはずの「は」

の付けられた名詞は日本人が英語に翻訳してもただの主語とする場合が多いのだから、**主語**という概念に対して助詞に二つの選択肢があることに変わりはない。また、英語では**主語**であっても、それを日本語化すると「は」と「が」の両方が用いられるということは上の例を見ても分かる（英語の不定冠詞と定冠詞の用法、また指示機能との対応が問われるところかもしれない）。すると、学習者の疑問に対するこのような応じ方は疑問に答えるのではなくその疑問を無理矢理変形するようなものだろう。このように変形するならば、どんな場合に日本語では**主語**ではなく**主題**という指示形式を選ぶのか、これを学習者に示さねば、疑問に答えたことにはなるまい<sup>1)</sup>。「が」よりも頻度の高い「は」が**主語**ではないのだから、その出現規則はすべて示せたとしても相当な数になるだろう。

### 3. 選択と規準、あるいは零度の設定

本稿では「は」と「が」の二項選択について考えているのだが、それぞれに説明概念を立てることは果たして必要なのだろうか。というのは、デジタル、つまり0/1の二進法が示すように、二つの項から一つを選ぶ必要最小限のキー概念は一般にただ一つだからだ。

フランス語における強形 (forme tonique; Jeに対するMoi, Tuに対するToiなど) のような文法範疇、また英語の定冠詞/不定冠詞における定/不定 (definite/indefinite) という概念の立脚の仕方そのものが教えてくれるのは、二項の単純な選択は二つの概念の対立によってではなく、単一の関心点によって行われるということである。**定/不定とは限定されるかされないか**である。強形とは「零度」、つまり無条件の標準に対して定位され、**強くない/強い**と選択が単純化できるものであり、この標準が「弱形」と見なされているわけではない。

**弱/強**ではなく、**普通/強**ならまさしく二進法だ。しかし、**既知/未知**、**新/旧**は二進法に転換できるとしても、先に述べたように、この関心点となる価値自体が客観的であるのと裏腹に他のいろいろな価値の中からこれが選ばれる選択を前提とせざるをえず、二重の選択と見なくてはならなくなる。

また二進法となりえるものであっても、二つの項のどちらが「零度」となるかが指定できなければ、まずその「零度」を選ぶ選択が必要となる。例えば、**普通/強**と**弱/強**とはほとんど同じに思える。しかし、**弱/強**でも**強**が「零度」になれば、**弱/普通**となる可能性が含まれる。つまり、**強調**が起こらないのは何も起こらないのではなく、**弱化**が起こっていると見え、逆に**弱化**が起こらないのは何も起こらないのではなく**強調**が起こっているとも見えるのである。このように「零度」が定まっていないと、まるで**強**でも**弱**でもない中立の状態があるかのように感じられてくる。すると、その選択は実際、**強/弱/どちらでもない**の三項選択のように感じられるはずであり、日本語学習者の迷いはこのような宙づりの状態のことなのかもしれない。

先に述べたように、「零度」は二つの項のどちらに置かれるにしても、置かれてしまえば、選択はこの上なくやさしくなり、助詞選択の問題はきわめて単純化される。<sup>2)</sup>

さて、例えば、「私／先週／京都／行きました」という語彙を用いて文を作るように言われれば、ほとんどの日本人は「私」に付ける助詞として「は」を選ぶだろう。そして、それは「は／が」の説明に持ち出されるさまざまな観念などまったく関わらない、完全に無条件の選択だろう。このように状況要素も、文脈も与えられていない時選ばれるのであれば、「は」が「零度」に置かれていると考えてよかろう。本稿で取り上げたさまざまな説明概念のなかで、もっとも古めかしく、おおざっぱすぎるとも思える**普通／強**は唯一単純選択を可能にする「零度」を定位しているが、この言語において普遍的とも言える質的感覚の上に、どのような場合に強調を選ぶか、その規準、規則が整えられさえすれば、実用上十分な使い分けとなるように思える。

どうしてそれが「が」ではなく、「は」なのかについての考察は後に送るが、このような無条件の選択に「零度」を見ることで、「は／が」の選択がかなり単純化されるというその結果を重視してよかろう。「零度」というものを考えず、これまで説明に用いられてきた概念の対立に準拠し、二つの助詞を差異化しようとするれば、二つの選択肢のどちらを選ぶにしてもそれらの概念に応じた動機が必要だ。そして、それが確定できない状況、どちらともつかず、選ぶことができない状況こそが問題となっていたのだから。

「は」が選択の「零度」ということになれば、これを使ってはいけない場合だけ「が」を選ばよく、その種の条件が何もない時には自動的に「零度」である「は」が選ばれるのだから、選択に関わる意識の負荷は極めて軽くなる。学習者には単純な条件と規則を示せばよくなる<sup>3)</sup>。背景となる選択条件を何も考慮しないで「は」を使うと言うと、それは使い分けではないではないかと反論されそうだが、これは、日本語の能力の不完全を意味するだろうか。言語についての知と、言語を使う知とは一線が引かれていいように思える。

#### 4. 規則と扱える選択

フランス語の人称代名詞強勢形 (*moi, toi, lui* など) の使用規則は普通次のようにごく簡単に表される。

- |                    |   |
|--------------------|---|
| ・強調                | <i>Moi, je vais sortir. Et toi, tu restes chez toi.</i> |
| ・C'est の後          | <i>Qui est-ce? - C'est moi, Pauline.</i>                |
| ・前置詞の後             | <i>Elle vient chez moi avec lui.</i>                    |
| ・比較の <i>que</i> の後 | <i>Il est plus grand que toi.</i>                       |

そして、この**0／強**の選択規則にならって、選択の零度を「は」とする、つまり、主語に

はまず「は」を付けようとし、特定の場合のみ「が」に代えると考え、次の文から強制規則とできるものを取り出せば、以下のようなになる。

○私は先週京都へ行きました。（零度）

- ・だれが先週京都へ行きましたか。
- ・私が先週京都へ行きました。（先週京都へ行ったのは私です）
  
- ・私が行った京都是古い町です。
- ・私が京都へ行ったのは先週です。
- ・私が京都へ行った時、雪が降りました。
  
- ・私は先週行った京都が好きです。

①主語となる疑問詞

②強調が必要な主語（疑問文の答えなど）

③従属節（名詞節、形容詞節、副詞節）<sup>4)</sup> 中における主語

④動詞と固有の結び付きをしている主語

これらは当然これまで行われた詳細な研究の中でも「は／が」の使用条件として触れられているし、また使用規則のすべてであるわけではない。しかし、あまりに精密な記述にまぎれて焦点が当てられず、目立たぬことが多いのではないだろうか。外国人の日本語作文によく見られる誤用の大部分はこれらの規則を徹底していればかなり少なくなるように思える<sup>5)</sup>。理由もなく「が」を使ったりせず、迷うぐらいなら「は」を使っていれば、たとえ「は」で表される微妙な意味が分かっていないとしても誤りがあるとはあまり見えないということだ。日本人が「は」を正しく使っていると見える時、果たしてどれくらいその意味を理解しているものだろうかと問うことも必要だろう。

このように単純化できる場合だけでなく、**既知の物事／未知の物事、古い情報／新しい情報、主題／主語**と言い表される場合も、「は／が」に感じられる質的な差異の上に積み重ねる形で規則を整理することが望ましい。0／強、あるいは弱／強ではこれらの助詞の定義として適当ではないから、これらを他の概念に置き換えるというのではなく、あくまでこれを土台とするのである。

二つの助詞の選択をこのように単純化し、0／1のデジタルで捉えたということは、当然、この逆位相で考えることも可能だということだ。つまり、「が」が「零度」であり、

特定の場合に「は」となると言うこともできる。しかし、「は」を「普通の指示」と感じる大多数の感性こそ「零度」を定位させる要因だ。

## 5. 規則と扱えない選択

上で述べたように、主語に付けられる「は」と「が」について選択規則の形式ですべての使い分けを置き換えることは可能と思えるが、この規則だけですべてを割り切ることが難しいのも確かだ。

これまで「は」と「が」に限らず、助詞の選択に関わるアンケート調査がいろいろな機会に行われている。その報告を読んでいて幾分不満を感じるのは、回答が、例えば80%と20%に割れている時、単に誤答が20%も出たと見られるぐらいで、どうして間違ったのか、それともどちらも間違いではないが何らかの傾向を反映して数値が偏ったのか、踏み込んだ考察があまりされないことである<sup>6)</sup>。

本論では考察を「主語」だけに限っているが、ある箇所で使うことのできる正しい助詞は「は」と「が」のどちらか一つという場合だけではなく、どちらも使用可能でありながら、本来自由であったスタイルの選択がどちらかに偏っているだけの場合もあろう。

- ・私がそれをもらったら、あなたにあげます。
- ・私はそれをもらったら、あなたにあげます。

「は」と「が」の選択が違っているこれら二つの文はどちらかが正しく、もう一方が誤りというわけではない。「私がそれをもらったら」が従属節になるか、「それをもらったら」だけが従属節になるか、全体への組み入れ方が違っているだけで、前段で挙げた規則③（従属節中における主語）に適っている。これはどちらの「私」を省略するかの違いでしかない。

- ・私は、私がそれをもらったら、あなたにあげます。

しかし、同じ語彙を全く同じ配列で文にする場合にも許容されるこのような構文の選択から生まれる二つの助詞の揺れが日本語学習者の迷いの元であることは確かだ。

- ・私は魚が好きです。
- ・私は魚は好きです。
  
- ・私は魚が好きではありません。      ・私は魚が嫌いです。

- ・私は魚は好きではありません。
- ・私は魚は嫌いです。

この「は」と「が」の選択では、どちらを使っても日本語として間違いではない。ただし、「好き」という肯定的な内容を述べる場合に「が」の頻度が高く、「好きではない」、「嫌い」のように否定的な内容を述べる場合に「は」の頻度が高いとは感じられる。「何が好きですか」、「何が嫌いですか」と疑問文で見れば分かるように、「好き」、「嫌い」のどちらの語彙も格が明示されるなら、それは「が」だ。それが「は」によって代行されることには、表現を和らげようとする意図、あるいは談話の姿勢のようなものが感じられる。

強制されないというのは、どちらを使っても正しく、その選択が話者の自由に委ねられているということだが、このような規則と見なせない用法について考えるには、「文法」の視点よりも、これと本来対になっている「表現」の科学である「修辞学」の視点こそ相応しいのかもしれない<sup>7)</sup>。

## 6. 「は」の弱化機能

「は」が主格の「が」だけではなく他の格助詞の代行をするという見方がされる一方、「は」はあくまで係助詞であり、格関係を表す能力など持っていないと反論されもする。しかし、格関係を表す能力のない係助詞だから格助詞の代行ができないとは言えない。逆に、「は」は格機能を含んでいないからこそ、格の明示を避けるため格助詞の代わりに用いられると理解できるからである。代行とは通常、同等、同質のものによってではなく異質なもの、往々にしてそれより質的に劣るもの、曖昧なものによって行われる。

- ・ Tom loves Mary.
- ・ 私、魚、食べません。

英語では、主格／目的格(直接)は格表示要素なく語順だけで表しうるが、日本語においても、この二つの格は特に、日常の会話で助詞なしの表され方が好まれている。このようなことを考えると、劣等な資格のものが代行をする、その究極の形が空記号による代行、つまり省略であるとも言えよう。

私が	日曜日に	ここで	昼御飯を	あなたと	食べません。
私は	日曜日には	ここでは	昼御飯は	あなたとは	
私	日曜日は		昼御飯		
	日曜日				

このように単独で格助詞「が」、「を」、時に「に」と交代でき、また、「では」、「とは」などのように付加される「は」は、言語の論理的機能においてだけでなく、感覚的側面において考察されるべきであろう。これは、次のような例に見られる文体の変調における連動からも言える。

- ・私は 奈良へ 行きました。
- ・私が 奈良へ 行った ことを 知っていますか。

柔らかく弱い調子のです・ます調で話していても、普通従属節中では語調が強く、明示的と言えるだ・である調が用いられる。そして、先に「が」の出現規則としたが、従属節中では「は」ではなく必ず「が」が格を明示するように用いられる。この連動する二つの交代が同じ心理背景を持った同質の行為である、つまり、「は」から「が」への交代にはです・ます調からだ・である調に変わるのと同じ変調があると見てもおかしくはあるまい<sup>8)</sup>。

4. において「は／が」の質を弱／強のような対立で捉えるのではなく、**0／強**あるいは**0／弱**のように「零度」を設定することで二項の選択の簡略化を提案し、「は／が」では「は」を零度としていた。しかし、「は」が「が」の代行をするのであり、「が」が「は」の代行をするのではない、つまり、「は」がそれ自体で格を表示する機能がなく、「が」のみが格を表示できることを考えれば、本来零度にあるのは「が」の方であり、これをいわば弱めるために「は」が用いられていると考えられ、**弱／強**の区別が日本人に自然と感じられるのであれば、単に代行するという中立的な言い方をするより、弱く変調する、あるいは**弱化**すると言うべきだろう。

しかし、**0／弱**の偏重の結果であったとしても、「は」が圧倒的な頻度で用いられているとこちらが零度になってしまっていると見るべきだ。「は」を使うことで弱くするとは感じず、「が」を使うと強くなると感じるというのはそういうことだ。このように「零度」の定位には数量的な要因も関わるということだが、これは日本語が歴史の中で選んだスタイルとも言え、言語と文化・社会の関わり方の問題として扱わねばならないだろう。

先に挙げた規則を見ても、「が」は格の指標として明示的であり、それだけでも本来はこちらこそ選択の「零度」と考えられる。しかし、明示的であるということが強いと感じられるのは多くの言語に共通のようであり、やはり標準となりにくいようだ。フランス語における強形のあり方を参照したが、強形に対する標準形を弱形と扱えなくはない。ただ、その必要がないだけであろう。標準とされるものがあり、ある場合に強形を用いるというのが多くの言語において負担の少ない捉え方なのだろう。しかし、日本語では「は」が「が」の代行をするのであり、その逆ではない。論理、文法の次元で標準となっているのは「が」だが、慣用という文化の次元、表現スタイルの次元では「は」が標準だと考えるしかない。

言葉のスタイルと深く関わる「強弱の選択」は日本語文法、特に初級文法で類義項の選

扱を説明する際、それらを統合する視点としてもっと用いられてしかるべきと思える<sup>9)</sup>。

## 7. おわりに

言語研究においては厳密、緻密であることが望まれ、日本語の文法研究においてもできる限り微妙な違いまで記述しようと試みられる。しかし、英語、フランス語など、西洋言語の文法では、明確な規定、使用基準が示される文法項目でありながら、日本語の方ではいつまでも有効な説明が与えられず、外国人学習者になかなか習得されないままのものも少なくない。日本語教育の場でことある度に言及される「は」と「が」の使い分けがその典型だ。

これら二つの助詞の説明に使われる、弱／強、旧／新、既知／未知、主題／主語などの概念はそのどれをとっても、日本語を母語とするわれわれ日本人には正当なものと感じられながら、これを説明に使っているだけでは外国人学習者にその使い分けを修得させられないできた。

そうであれば、これらの助詞の使い分けがすでにできているわれわれ日本人をさらに深く理解させるための説明より、日本語を学ぶ外国人がこれらの助詞の使用に際して迷うことがなくなるよう明確な基準を示すことこそ必要であり、そのためにはまずこの問題の核心がどこにあるのかを確認し、視点を適切に取り直さねばならないと思えた。

現実に使われた言葉から帰納的に導かれるものでありながら、逆に、いわば演繹的に実現するという循環に置かれているのが文法だが、この研究においては一般的に厳密であろうとするため主観的で不確定な要因を考察からはずし、確定できる客観的な要因だけに注目しがちだ。これは不純なものを取り除く、純化とも見えるが、やはり一種の切り捨てによる対象の変形に他ならない。本来言語と密接に関わるものでありながら、その外にあると判定され、切り捨てられているものとは、不安定に変化する人間の感覚であり、そのような主観同士が互いに持ち合っている微小な差異である。しかし、誤差を生むもの、また誤差として無視できるものを全く見ないで果たして厳密な考察が行えるだろうか。アプリオリに「無意味」と見なすことで一部を切り捨て、対象を「変形」したことで、問題が先送りになってしまうことはよくある。

客観的に確定できる材料だけで構築された「文法」が無意味だと言うのではない。自然なものとは言えなくても顕在化された「規範」が求められる限りそれは有効であり続ける。しかし、このような視点で記述された文法が本質的なずれを露呈してしまう場合もある。それは、ただ言語事象についての説明と理解を目的とするのではなく、これを手段として能力の形成を目的とする言語教育の場合である。ところがこの文法の理解が学習過程における段階的な目標とされることから、往々にしてそれこそが目的と錯覚されやすいのだ。

日本人の子供は日本語の文法を分析的に理解しているから日本語を使いこなせているわ

けではない。日本語を使いこなせていることと理解しているということは別だ。だからこそ日本語研究者はいつまでも研究が続けられるのであり、もし使いこなせることと理解していることが同じであれば、専門的な研究による理解など必要ないとさえ言われかねない。子供が言語を使いこなしているその能力がどのような仕組みになっているのか、言語教育を考えるならまずこの理解が何よりも優先されねばならない。

本論では、助詞「は」の非常に広範な出現を敢えて追わず、ただ「主語」という概念に関わることわざの側面だけを考察した。それが、ほとんどの日本語学習者が学習活動において日常的に用いる平明な概念であり、重要な課題となっているからである。ここで試みた扱い方がどの程度効果を生めるか、機会があれば分析、報告したい。(了)

## 注

- 1) 「は」を「が」とのみ比べるのではなく、他の助詞とも比べ、「提題」と見なされるその交代、代行機能なども総合的に考察することが確かに必要だ。ただその場合も、「は」にしかじかの機能があると分析するに止まらず、さらにそのような機能はどのような場合にどのような基準によって選択使用されるのかまで追求しなければ、重要なものがこぼれてしまうのではと思える。本論では、このような選択そのものの捉え方に焦点を合わせ、問題とするため、日本語学習者にとって最も頻繁に問題となる「主語」のみに考察を限定した。

参考：日本語教育辞典、大修館。

- 2) かつて「標準語」という概念があり、東京方言に近いものが標準という「零度」に置かれ、他の方言はこれとの隔たりによってさまざまに判定されていた。単純には、「零度」にある標準語が「いい言葉」で、方言は「悪い言葉」と扱われたわけだ。「標準」は社会的次元ではこのようにある種の絶対的価値を付与されやすいものだが、個人的次元においては本来の「零度」らしく、無色透明で何らその性質が感知されないものとなる。「標準語」しか話さない者は、「零度」である自分の言葉に対しては取り立てて質を感じず、これとは異質な「方言」に対して「悪い／汚い／滑稽／・・・」などの質を感じる。逆に、「方言」を母なる言葉として育ち、後に「標準語」を修得した者には、「零度」が「方言」に置かれたままで、「標準語」を使いながらそれにある種の性質、例えば「きれい／冷たい／・・・」という性質を感じる者が少なくないだろう。「標準語」に浸りきった地方出身者が出身地の方言を無色透明ではなく、外国語のように異質なものと感じるようになることは、「零度」がごく簡単に移動するものであることを示している。しかし、だからといってなくなるようなものでもない。

「標準語」という概念は、社会的、政治的意味あいのために排斥され、「共通語」という当たり障りのない言葉に取って変わられたが、「標準」という概念まで非難されるものではない。社会的なものであると同時に、個人的で主観的なものでもある言語には、必ず無色透明の「零度」という「標準」があり、その地点こそ全てを価値づける自我の核心であるはずだ。

参考：田中克彦、言語の思想-国家と民族のことば、NHKブックス、1975年。

田中克彦、言語からみた民族と国家、岩波現代選書、1978年。

田中克彦、ことばと国家、岩波新書、1981年。

3) 参照：三上章、日本語の論理、くろしお出版、1963年。

嘘も方便というわけではないが、扱い方一つで違ってくる有効性はやはり無視されられるべきではないだろう。例えば、三上章は西洋言語の文法にならって、「がのにを」四格を囲い込むが、そのような視点を採ることで日本語教育における格の扱いはきわめて簡明にできると思える。研究においてならすべての格を対等に見据えるのが当然だが、論理の骨格となるような四つの格を敢えて特権化することで、個別の定義以外に他の格ではないという排除選択の相を帯び、格の配置が明確になるという教育においては得難い利点をこの視点は持っている。

4) ただし、次の例のように、名詞節でも引用文として自立するものと扱われたり、主説に先行する原因、理由節などが自立的に扱われる場合は除外される。

- 地球が丸いということはだれでも知っています。
- 地球は丸いということはだれでも知っています。
- あの方が忙しいので、私とその仕事をします。
- あの方は忙しいので、私とその仕事をします。

5) 筆者は現在中級者、上級者対象の日本語作文の授業を開講しているが、初級を抜け出したばかりで日本語の習得がまだまだの者に限らず、読解能力も高く、かなりの日本語能力を有しているような者でも、ここに挙げたごく単純な規則に違反しているのをよく見るということは、ほとんどの者が日本語の習得過程で助詞の選択について現実的で有効な説明を受けていないのではないかと思わせる。

参照：

中川正弘、「作文」を「読む」－「書く」技能の定位と展開、『留学生日本語教育』、第4号、広島大学留学生センター、1992年。

中川正弘、作文の誤りと文体、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年。

中川正弘、作文と解釈、広島大学留学生センター紀要、第4号、1994年。

中川正弘、外国人の日本語、日本人の日本語、『留学生日本語教育』、第6号、広島大学留学生センター、1994年。

中川正弘、作文の添削と文体差、『留学生日本語教育』、第7号、広島大学留学生センター、1995年。

6) ドメニコ・ラガナ、これは日本語か、河出書房新社、1988年刊参照。

ラガナは日本語研究者によって文法的／非文法的、適／不適の判定を下された多くの文を、一般の日本人がいったいどのように判断するかをアンケートし、その結果を報告している。そして、久野章、柴谷方良、井上和子らが分析に用いた言語資料から選び出した文のかなりの数について、これら研究者の判定とはまったく異なる結果がでてきたことで、日本語には外国人学習者の目安になる、文法性を計るための基準がないのではないか、無数の idiolects (個人語) が共存しているかのようだ、と結論している。そもそもラガナ自身の経験で、彼が日本人作家の助詞使いをそっくり真似て日本語の文章を書いているにもかかわらず、他の日本人がその助詞使いを間違いだ判定することが度々あったことで抱いた疑問のようである。

7) このような文法と修辞学の複眼思考は例えば、バイイの文体論の基底にある。

参考：BAILLY, Charles - *Traité de stylistique française*, Paris, Klincksieck, 1909.

- 8) 文学作品の表現要素を単独で分析すると誤った解釈を下しやすいため、作品の表現単位（語、文に限らず作品を構成する要素となりうるものすべて）を直接文脈における他の要素との共鳴、共振を見落とさず、また読者において言語の直接効果として得られる意味作用を拠点とすることで厳密にテキストの果たす意味構造を分析しようとする構造文体論の視点はこのような文法事象の分析にも適用できるようなと思える。

参考：RIFFATERRE, Michael - *Essais de stylistique structurale*, Flammarion, 1971.

- 9) **です・ます形／辞書形、ので／からの**選択などの説明には質、感覚への言及があるほうが学習者も理解しやすいと思える。